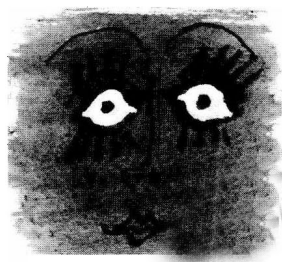


ロミオの歌  
五木寛之

# ゴキブリの歌・五木寛之



毎日新聞社

## ゴキブリの歌



520 円

著者 五木寛之／©1971

昭和46年 8月15日 第1刷

昭和46年 8月17日 第2刷

編集人 浜田 琉 司

発行人 朝 居 正 彦

印 刷 図 書 印 刷

製 本 大 口 製 本

発行所 毎日新聞社

〒100 東京都千代田区一ツ橋

〒530 大阪 市 北 区 堂 島 上

〒802 北九州市小倉区紺屋町

〒450 名古屋市中村区堀内町

## Hiroyuki Itsuki

1932年 9月30日福岡県八女市に生まれる。早大露文中退。1965年「さらばモスクワ愚連隊」で第6回小説現代新人賞受賞。1966年「蒼ざめた馬を見よ」にて第56回直木賞受賞。

## 主要作品

G I ブルース

吊いのバラード

海を見ていたジョニー

青年は荒野をめざす

内灘夫人

風に吹かれて

裸の町

デラシネの旗



0095-665900-7904

ゴキブリの歌 目次

|          |     |
|----------|-----|
| プラハの恋人たち | 7   |
| 食い狂いの世代  | 74  |
| 博多のうどん   | 83  |
| わが年、わが日々 | 92  |
| 記憶の底の女たち | 100 |

メロン・パン筆福事件

秋の日はあやしくも

薄情薄恨に悔あり

盲腸によせる妄想

ある冬の日

十八年前の日記から

えべっさん詣り

艶歌と援歌と怨歌

われわれのケマダ

電話についての感想

パリの小さな広場

209 198 190 181 172 153 145 136 126 117 108

|            |     |
|------------|-----|
| 思いちがいについて  | 218 |
| 物を書くということ  | 226 |
| 私が哀号と眩くとき  | 236 |
| 一宿二飯の恩義    | 252 |
| わたしの嫌いなもの  | 262 |
| 津和野の町のミニ   | 271 |
| 続わたしの嫌いなもの | 280 |
| 平壤からの脱出    | 290 |
| 明るい快適な場所   | 298 |
| 去年の雪いまいずこ  | 307 |
| あとがき       | 316 |

挿 装  
画 幀

村  
上

豊

# ゴキブリの歌



## プラハの恋人たち

### 1

去年の今ごろ、チェコスロバキアのプラハにいた。

短い旅行だったが、忘れ難い記憶がある。そのことを思い出させたのは、ローマから来た一通の葉書だった。

たどたどしい英文でしたためられたその葉書は、私が去年プラハに滞在した間に知合った若い恋人同士からのものである。娘のほうはスヴァタヴァという。奇妙な名前で、何度きいてもすぐ忘れてしまう。

スヴァタヴァという語感、何となく若くて美しい娘のようではなく、私はその名前を忘れるたびに、それが大変失礼なことだと知りながら、何度となく彼女にきき返したものだ。

私がある名前から連想するのは、昔よく台所で使用されていた、あのタワシなのだ。タワシとスヴァタヴァとは、かなりちがうが、どういうわけか、私はそんな妙なものを連想したのだ。

った。

そのタワシ、いや、スヴァタヴァの恋人の青年のほうは、ヨアヒムと言った。こちらは憶えやすかった。

私の所へ舞込んできた葉書の差出人の名前は、スヴァタヴァとヨアヒムの連名になっていた。文面は英文なのだが、それは中学一年生程度の英語の力で書かれた文章である。したがって、私にも意味がよくわかった。彼と彼女が私の語学力に合わせて書いたのかも知れぬ。

へヘルプ・ミー

と、最初に書いてあり、その下に強勢符が打ってある。スヴァタヴァとヨアヒムの二人の連名の葉書なのに「へミー」はおかしい、と思ったが、一心同体の恋人なのだから、その辺は文法通りでなくてもいいのかも知れぬ。以下、その文章を意識すれば、次の通りとなる。

助けてちょうだい！

私たちはお金がないの

それから煙草もないの

イタリア人は不親切です

だから食べものもないの

助けてちょうだい

少しでもいいからドルを送って

私たちはアメリカへ行きたいのです

それでプラハを出たのです

そしてイタリアへきたのです

だけど仕事がありません

だから

私たちはお金がないの

それから煙草もないの

だから食べものもないの

助けてちょうだい

このアドレスへお金を送ってください

あなたは私たちの友達です

だから助けて！

ヘウイ・ハヴ・ノーマネー、  
ノーシガレット、  
アンド・ノーフード

という文章は簡にして明、彼らの必死の氣持がひしひしと伝わってくる名文のような氣がした。

へ火の用心 おせん泣かすな 馬肥やせ

くらいには率直で飾り氣のない文句だと私は感心した。そこで私がドルを送れば友情美談となるのだが、私はしばらく考えて、その葉書を本の間にはさみ、彼らのことを忘れようと散歩に出かけた。ちょうど今ごろの季節だったな、と思うと、少し心が痛んだ。

私がスヴァタヴァとヨアヒムの二人に出会ったのは、プラハのヴァーツラフ広場から大通りを降りて行き、左へ折れて少し歩いた所にあるクラブ風のダンス・ホールでだった。

それは前面にバンドのためのステージがあり、フロアを囲んでテーブルが並び、壁際はカウンターになっているといった古風なホールである。

そこは若い男や女で、ひどく混んでおり、中には新宿あたりでよく見かけるチンピラ風の兄ちゃんや、お姐さん風の娘たちも少なくなく、私にとって何となく親しみやすい場所だった。

私がカウンターで飲んでいると、隣に坐ったヒゲの青年が突然、英語で話しかけてきたのである。それがヨアヒムだった。

ヨアヒムは、ちょっと見ると二十七、八歳位に見える痩せた長身の青年だった。面長で引緊

まった顔つきの、なかなかのハンサムである。頬から顎にかけてヒゲをはやしているのにやけた感じがなく、どこか哲学者のような知的な雰囲気さえ感じさせた。実際の年齢は、私が思ったより三つかそこらは下にちがいない。ヨーロッパの青年は、いやに老成した感じがあるものである。

「日本人？」

と、彼は私の顔をのぞき込むようにしてたずねた。

「そうだ」

と、私は答えた。私も英語は中学の初級クラス並みであるから、自然と応答も簡にして明、無駄をはぶいた男性的なスタイルをとらざるをえない。

「踊らないのか？」

と、彼。

「相手がいない」

と、私。

「あの子と踊ればいい」

ヨアヒムはカウンターの端に坐っている大柄な娘を指さして事もなげに言った。

「ぼくが連れてきてやる」

「ちょっと待て」

と、私は彼を制して、その娘のうしろ姿を観察した。たとえ異境にあらうとも、やはりパートナーは当方の趣味思想に適合した娘でなくてはならぬ。飛びついて相好をくずすのは、エコノミック・アニマルの自尊心が許さないのだ。

うち見たところ、彼女は実に見事なスタイルの持主であるかに思われた。ウエストがくびれて胸と腰部が堂々と発育している。髪は栗色で柔らかく背中に流れている。綺麗な脚と白い皮膚を持っていた。

「いい子だな」

と、私は言った。

「いい子だ」

と、その青年は哲学者の如き目でうなずき、

「連れてくる」

と、立上がった。

私は心臓が急に激しく打ちはじめたので、水割りをもう一杯たのんだ。煙草を取出して口にぐわえ、パートナーを待つポーズを作って短い脚を組む。

親切な青年が連れてきた娘を見て、私は仰天した。実に素敵な美人なのである。化粧も濃く

なく、つけまつ毛もつけていない。目は灰色がかった青で、まだ少女っぽい清潔な感じが額のあたりにあった。

「ハロー」

と、彼女は微笑して言った。

「ハロー、ベイビー」

と、私は答えた。なぜベイビーという文句が口について出たかはわからない。アメリカのギャング映画で、酒場のボスが踊り子の頬っぺたをちょっと指でつついて、そんなふうに言うシーンが頭の中に残っていたせいかも知れぬ。

「彼女の名前はスヴァタヴァ」

と、青年は言い、

「ぼくはヨアヒム」

と、つけ加えた。私も名前を名乗り、二人に改めてカウンターの椅子をすすめた。こういう場合のしきたり通り、二人に酒をすすめると、スヴァタヴァはコーラを、ヨアヒムはウイスキーを頼んだ。

「きみたちは友達なのか」

と、私はたずねた。二人は顔を見合わせて少し笑い、私にわからない言葉で何か囁き合った。

「われわれは友人である」

と、ヨアヒムは言った。

「だが世界のすべての人間は友人ではないか」

「然り。ぼくも今や君らの友人である」

私は水割りを一息にあげ、もう一杯お代わりを頼んだ。英語の片言で喋るには、アルコールが一番きく。私はスヴァタヴァがとても気に入ったのだった。高級ホテルのクラブなどにたむろするセミプロの婦人たちとくらべて、彼女はあきらかにちがう人種だった。オフィス・ガールか女子学生かは知らないが、若々しく健康で魅力的な微笑を持っていた。

「踊ってこいよ」

と、ヨアヒムが言った。

「ちょっと待て」

と、私は答え、早いテンポのワルツが終わるまで待機することにした。折角の美女と踊るのに、あんなあわただしい踊り方はしたくない。するとこちらの気持が天に通じたか、音楽は恐ろしくスローなハーレム・ノクターンにかわった。何となくヌード劇場の主題曲を思わせるその曲は、きわめて官能的で、かつプラハの夜のBG音楽としてふさわしいものようであった。私はおもむろにカウンターの椅子より滑り落ち（靴が床につかぬほど高いのである）、西洋式